

って、もみ合い商状を呈している。

株式投信の残存元本は、3月中137億円減(前月123億円減)と8か月間連続して純減をみた。これは上記の市況不振を映じてユニット型投信の設定が依然として伸び悩んだのに加えて、解約・償還が引き続き高水準であったためである。なお、3月中に投信は株式を69億円買い越した(前月99億円の買越し)にもかかわらず、3月下旬に投信組入れ株式412億円を証券保有組合へ肩代りしたため株式組入れ比率は大幅に低下し、3月末には69.4%(前月74.2%)と、ここ数年来の最低水準となった。

3月の増資は、増資抑制措置により、5社97億円にとどまった。また4、5月は目下のところ皆無の見込みである。

### 増資状況

(単位・億円、カッコ内前年同期)

	市場第1部 上場会社	市場第2部 上場会社	合計
39年4~6月	1,115(452)	90(121)	1,205(573)
7~9月	1,405(1,155)	96(184)	1,502(1,339)
10~12月	1,385(1,182)	115(127)	1,500(1,309)
40年1~3月	189(948)	40(137)	229(1,085)
4~6月 (見込み)	120(1,115)	0(90)	120(1,205)
39年10月	335(343)	41(44)	376(387)
11月	683(394)	46(74)	729(469)
12月	367(444)	28(9)	395(453)
40年1月	87(406)	37(14)	125(420)
2月	7(269)	0(65)	7(334)
3月	95(273)	3(58)	97(331)

(注) 40年4月、5月は0、6月は120億円の見込み。

3月の公社債、事業債の起債は、純増ベースで249億円と前年を若干上回った。一方消化環境は、期末月の関係から、生保、投信が例月を大幅に上回って買い入れたほか、都銀筋も金融緩和のおりから漸次買入り傾向を改めるなど、総じてかなりの好転をみた模様である。なお40年度の起債規模については、このほど関係者間で決定をみたが、金融緩和を迎えつつある際でもあり、かなり、大幅な増加となっている(満期償還のみを調整した純増ベ-

### 起債状況

(単位・億円、カッコ内純増額)

	2月	3月	前月比	40年 4月 (見込み)	39年 4月
事業債	217.3 (107.5)	218.2 (109.1)	0.9 (1.6)	227.9 (143.4)	244.4 (116.2)
一般	117.3 (60.3)	118.2 (63.8)	0.9 (3.5)	125.9 (80.0)	136.4 (64.4)
電力	100.0 (47.2)	100.0 (45.3)	0.0 (-1.9)	102.0 (63.4)	108.0 (51.8)
地方債	39.5 (27.3)	42.8 (29.6)	3.3 (2.3)	42.5 (25.3)	46.6 (27.1)
政府債	144.0 (112.3)	203.0 (110.6)	59.0 (-1.7)	162.0 (133.8)	139.0 (104.9)
計	400.8 (247.0)	464.0 (249.2)	63.2 (2.2)	432.4 (302.5)	430.0 (248.2)
金融債	938.2 (409.9)	976.9 (370.2)	38.7 (-39.7)	1,088.0 (511.9)	795.1 (405.3)
利付	391.7 (290.4)	434.7 (329.1)	43.0 (38.7)	468.0 (353.8)	333.2 (326.0)
割引	546.5 (119.5)	542.1 (41.1)	-4.4 (-78.4)	620.0 (158.1)	461.9 (79.3)

スの前年度比+36%、39年度の前年度比+7%)。

一方3月の金融債は、純増ベースで370億円と前月に比べ40億円方減少した。これは年末中小企業金融対策の一環として資金運用部の購入した商中債の買入償却(70億円)が行なわれたことを主因として割引債が大幅に減少したのが主因で、利付債は逆に、金融機関筋の期末買入れ増、一般法人筋への積極的な売込みなどのほか、資金運用部による興長銀債の買入れ(興長銀はこれにより機械延払い金融を実施22億円)もあって、大幅な増加をみた。なお、加入者引受け電々債の市況は、金融緩和を映じて依然じり高傾向を続けており、その結果利回りは一段と低下した。

## 実体経済の動向

### ◇生産の横ばい傾向続く

2月の鉱工業生産(季節変動調整済み)は、前月

比-0.1%と、いぜん横ばいを続けている(3ヵ月移動平均値によると、11月-0.3%、12月-0.4%、1月+0.2%)。

2月の生産を特殊分類別にみると、資本財と消費財が増加をみたが、生産財と建設資材は減少した。資本財の増加は久方ぶりであるが、これは電力向け大型機械の完工と官公需を中心とする通信機械の増加によるものである。汎用機械やトラックなどは民間設備投資の鎮静を映じて減勢を続けている。次に消費財は耐久、非耐久とも増加を示したが、前者は輸出好調にささえられた時計などの増産が中心であり、後者は染色織物・メリヤスなど繊維の増加によるものであった。一方、建設資材は、セメントや金属性建具が増加したものの、亜鉛鉄板と板ガラスの減産が響いて減少した。またこれまで緩慢ながらも増勢を続けてきた生産財が冷延薄板、人絹糸、揮発油などを中心に減少を示し、生産調整の効果が次第に現われてきていることを示している。

なお3月の生産(速報、季節変動調整済み)は、前月比-0.2%と微減した。生産財が引き続き横ばいとなったほか、建設資材、耐久消費財がかなり減少したためである。資本財は大型機械、乗用車、トラックなどの増産にささえられて引き続き増加した。

次に2月の鉱工業出荷(季節変動調整済み)は前

### 特殊分類別生産動向

(季節変動調整済み、前期(月)比増減率・%)

	39年				39年			40年		
	1~3月	4~6月	7~9月	10~12月	12月	1月	2月			
投資財	3.9	7.8	3.2	1.9	-0.3	-0.2	0.9			
資本財	4.7	9.8	2.2	3.0	-0.3	-1.1	2.4			
同(輸送機械を除く)	2.1	6.0	1.3	3.1	-1.9	-2.8	4.9			
建設資材	3.1	2.1	6.2	-1.9	-0.4	2.6	-1.1			
消費財	0.9	1.2	1.1	0.7	0.6	-0.2	0.3			
耐久消費財	3.8	-0.7	-3.1	-0.6	0.9	-1.9	0.8			
非耐久消費財	0.7	1.3	2.8	1.6	0.4	0.7	0.5			
生産財	4.9	0.8	4.2	2.3	1.2	1.1	-1.2			

(注) 通産省調べ(35年=100)。

月比+1.0%と過去数ヵ月に比べればやや大幅な増加となったがこれには資本財における前記の特殊要因がかなり影響している。ただ、耐久消費財にはやや荷動き回復の気配もうかがわれたいではない。すなわち、これまで減少を続けてきた耐久消費財が、前月、当月と引き続いて増加をみせているが、これは時計、ミシン、自動二輪車などが増加しているほか、テレビ、電気洗たく機などの民生用電気機械がいくぶん持ち直しぎみのためである。非耐久消費財も繊維品を中心に増加している。しかし生産財の出荷はユーザー、ディーラー段階の在庫調整を映じていぜんふるわず、鉄鋼(銑鉄など一次製品)、繊維(人絹糸、スフ、合繊)、化学(無機薬品、塩ビ)など多くの業種で減少した。

なお3月の出荷(速報、季節変動調整済み)も、+1.2%と増加を続けたが、これは大型機械の出荷が引き続き増加したほか、耐久消費財が著増したことによるもので、その他は総じて落ち着いた動きを示した。

これまで増勢を続けてきたメーカー製品在庫(季節変動調整済み)は2月には前月比横ばいとなった。建設資材と生産財は増加しているが資本財と消費財は減少した。すなわち生産財では、石油

### 生産・需給動向(鉱工業)

(季節変動調整済み、増減率・%)

	39年				39年			40年		
	1~3月	4~6月	7~9月	10~12月	12月	1月	2月			
生産指数	159.5	164.9	170.2	172.9	171.9	172.6	172.5			
前期(月)比	3.5	3.4	3.2	1.6	0.4	0.4	-0.1			
前年同期比	21.3	19.8	16.2	12.5	10.7	10.4	6.2			
出荷指数	157.1	161.7	164.3	166.5	165.7	166.1	167.8			
前期(月)比	4.0	2.9	1.6	1.3	0.2	0.2	1.0			
前年同期比	19.1	18.0	14.0	10.2	8.6	8.0	5.6			
製品在庫指数	186.1	162.4	200.3	218.6	218.6	222.5	222.5			
前期(月)比	3.4	3.4	4.1	9.1	2.8	1.8	0			
前年同期比	12.8	16.0	16.6	21.5	21.5	22.9	20.1			
在庫率指数	117.5	116.9	119.4	131.9	131.9	134.0	132.6			

(注) 通産省調べ(35年=100)。在庫は期末在庫。前年同期(月)比は原指数による。

(ガソリン、軽油)、繊維(人絹糸、合繊織物)は微減したが、鉄鋼一次(薄板、圧延鋼材)、非鉄二次(伸銅品、アルミ圧延品)、化学(合成樹脂)などがかなり大幅に増加したため、全体としては増勢が続いた。他面資本財では標準電動機、変圧器など汎用機械の在庫は増加ぎみであったが、トラックを中心に全体では減少した。また耐久消費財では、出荷の伸長から自動二輪車、電気洗たく機などを中心に減少をみた。

なお3月のメーカー製品在庫(速報、季節変動調整済み)は、徐々に減少(前月比-1.8%)した。輸送機械を別とすれば各財とも減少しており、在庫調整が進展しつつあることの反映とみられる。2月のメーカー原材料在庫(季節変動調整済み)は前月比-0.3%の微減となった。輸入素原材料在庫は久方ぶりに増加をみたが、国産分が製品、素原材料とも減少したためである。国産製品原材料在庫の減少は、鋼材、原糸の在庫調整が原因であり、とくに機械メーカーでは、ここ1、2か月手持ち鋼材の在庫べらしがかなり進んでいる模様である。なお輸入素原材料在庫の増加は、ディーラーからメーカーへの輸入綿花の引渡しが多かったことが主因である。なお、1月

の販売業者在庫(季節変動調整済み)は、前月比+1.5%の増加であった。これは綿花を中心とする輸入素原材料在庫の増加が主因である。

最後に設備投資関連指標の動きをみると、まず2月の一般資本財出荷(季節変動調整済み)は前月比4.3%の増加となったが、これには大型電気機械の不規則変動などが響いていることは前述のとおりである。この間、先行指標である機械受注(海運を除く民需、季節変動調整済み)は前月比7.2%の増加となった。しかしこれも、電力業からの受注が当月たまたま著増したことによる点が大きく、これを除くと-11%といぜん減少傾向が続いている。業種別にみても、電力のほか食品、化学工業からの受注がふえている以外は軒並み低調である。

◇一部に底入感もうかがわれるが、なお総じて頭重い商状

3月から4月前半にかけての商品市況をみると、石油、紙(洋紙)が立直り傾向を強めたほか、セメント、基礎化学薬品類もおおむね底堅い動きを続けた。このほか、大宗商品である鉄鋼、繊維の一部にも、月末から月初にかけて小戻しの動きがみられたが、これらはまもなく再び頭打ちないし軟化傾向に転じており、地合いは総じてなお頭重い商状を続けている。

主要商品の動きについてみると、まず鉄鋼では条鋼類が必要期入りかたがた先行き金融緩和期待などによる底値感の台頭から漸次下げ渡り、4月にはいって小戻し商状をみせ、亜鉛鉄板もメーカーの市況対策強化を入れて更月後小反発を示した。しかし、大手メーカーの主力製品である薄板は依然供給面の圧迫が根強いいため軟化傾向をあらためず、厚板も実需の停滞などから頭重い商状を持続した。繊維では生糸が輸出好調、品薄人気からまた人絹糸が過剰在庫の漸減、仕手の介入などから再び小反発をみせ、そ毛糸も月末近く豪毛相

需要関係の指標

	39年			39年			40年		
	6月	9月	12月	12月	1月	2月	12月	1月	2月
素原材料在庫 (在庫率)	113.6 (77.9)	115.3 (75.2)	110.8 (72.7)	110.8 (72.7)	111.8 (72.5)	112.4 (73.5)			
うち輸入分 (在庫率)	117.3 (79.1)	115.8 (72.5)	114.3 (68.2)	114.3 (68.2)	112.5 (69.6)	115.8 (72.8)			
製品原材料在庫 (在庫率)	136.1 (85.9)	138.3 (85.7)	142.2 (87.3)	142.2 (87.3)	142.2 (87.5)	140.7 (86.8)			
販売業者在庫	173.6	179.9	195.0	195.0	197.9				
	39年			39年			40年		
	4~6月平均	7~9月平均	10~12月平均	12月	1月	2月			
機械受注 <small>(海運を除く民需、同季節調整済み)</small> <small>(船舶を除く)</small>	661 (708)	698 (662)	592 (651)	648 (662)	480 (549)	577 (589)			
機械販売除 (同季節調整済み) <small>(輸送機械を除く)</small>	952 (1,004)	1,203 (1,112)	994 (1,049)	1,024 (1,066)	944 (1,157)	1,047 (1,126)			
資本財出荷	174.2	174.6	179.9	177.8	175.8	183.3			

(注) 在庫出荷は通産省調べ、季節変動調整済み指数(35年=100)。機械受注、販売は企画庁調べ、127社、同季節調整は本行統計局センサス法による。

場の底入れや市中在庫の減少を映じて小反騰を示した。しかし大宗の綿糸、スフ糸は月初に一時やや持ち直したものの増産懸念が強いこと、機屋が買控え態度を続けていることなどから再びジリ安商状となり、織物類も内需不振から荷動き閑散のうちに低迷を持続した。一方、石油は揮発油が生産、出荷調整の奏功を主因に依然堅調を示し、灯油も季節的軟化期にかかわらず底堅い動きを呈した。紙も板紙は在庫圧迫からなお不ざえながら上質紙はメーカーの自主減産を背景に立直り傾向を続けた。また、化学では基礎薬品が総じて強含みに推移したほか、塩ビも減産など市況対策実施から更月後やや持ち直し気配を示し、セメントも官公需の堅調などにささえられ強保合いを続けた。この間、非鉄は、亜鉛が実需の低調から依然さえないものの、すず、鉛が海外高から強調となり、銅も行き過ぎた調整気運の反動などから4月にはいって小反発を示した。他方砂糖は糖価対策の難航、先行き供給過剰懸念などからさらに安値を更新した。

このように最近の商品市況をみると、石油、洋

紙、セメントなどは引き続き立直り傾向を示しており、主力商品の鉄鋼、繊維でも一部にはあるが小戻し商状もみられた。こうした動きが生産調整の持続によってささえられたものであることはいうまでもないが、このほか金融緩和期待や春場需要期入りに伴って、市中の空気に多少とも気分的な明るさが生じている面も否めない。現に鉄鋼条鋼類では若干の荷動き増も伴って底入れ感がではじめているようであり、繊維についても中間需要の台頭期待から値頃感が漸次芽ばえつつある。しかし、総体としてみればなお気迷い感が根強く尾を引いており、これがそのまま本格的な在庫手当の盛上がりにつながるような気配はうかがわれない。これはやはり現下の供給過剰感や一部に残存する信用不安感などから、景気の先行きについてなおはっきりとした見定めがつきにくいことによるものと思われる。

ところで、生産に対する業界の態度をみると、とも角も市況の回復ないし維持をはかることが先決との考え方が強まっており、当面供給抑制基調

### 卸 売 物 価 指 数 の 推 移

(単位・%)

	引締め前			引締め後			最 近 の 推 移						
	37/11 ~38/11			38/12 ~39/11			40年			3月			4月
	+	-	+	1月	2月	3月	上旬	中旬	下旬	上旬			
総 平 均	+ 3.7	- 0.7	+ 0.4	+ 0.5	保 合	- 0.1	- 0.1	- 0.2	保 合	+ 0.1			
食 料	+ 9.2	- 4.0	+ 3.6	+ 2.2	+ 0.3	+ 0.5	+ 0.3	- 0.2	保 合	+ 0.1			
織 維	+ 11.1	- 6.7	- 0.4	+ 1.0	+ 0.5	- 1.1	- 0.6	- 0.4	- 0.1	+ 0.6			
鉄 鋼	+ 4.2	- 0.5	- 1.0	保 合	- 0.4	- 0.7	+ 0.1	- 0.8	- 0.6	- 0.1			
非 鉄	+ 1.1	+ 19.9	- 3.4	- 0.9	- 1.9	- 0.8	- 0.8	- 0.1	+ 0.1	+ 0.1			
金 属	+ 0.2	+ 3.6	+ 1.2	+ 0.1	+ 0.1	保 合	+ 0.1	保 合	- 0.1	+ 0.1			
機 械	- 1.4	+ 0.4	+ 0.2	+ 0.2	- 0.1	+ 0.1	保 合	保 合	保 合	保 合			
石 油・石 炭	+ 0.8	- 0.8	+ 1.1	+ 0.5	+ 0.1	+ 0.1	+ 0.1	- 0.2	保 合	+ 0.2			
木 材	+ 3.6	- 1.1	- 1.3	- 0.3	- 0.3	- 0.4	- 0.6	- 0.3	+ 0.4	+ 0.2			
窯 業	- 0.2	- 1.5	+ 0.6	+ 0.3	+ 0.2	- 0.2	- 0.1	保 合	保 合	保 合			
化 学	- 0.2	+ 2.3	+ 0.7	+ 0.1	+ 0.3	+ 0.3	+ 0.1	+ 0.2	保 合	+ 0.1			
紙・パ ル プ	+ 6.4	+ 2.7	- 1.3	- 0.6	- 0.2	+ 0.1	+ 0.3	- 0.1	保 合	保 合			
雑 品	同水準	+ 0.7	+ 0.7	+ 0.2	+ 0.9	- 0.4	- 0.1	- 0.1	- 0.2	- 0.1			
工 業 製 品	+ 2.9	- 0.8	+ 0.1	+ 0.3	保 合	- 0.1	保 合	- 0.1	- 0.1	+ 0.1			
非 工 業 製 品	+ 6.3	- 0.4	+ 1.4	+ 1.4	保 合	- 0.3	- 0.4	- 0.3	保 合	+ 0.2			

を持続していこうという意向を示す向きが多い。たとえば鉄鋼などでも、最近国内向け亜鉛鉄板の大幅減産が決定されたほか、無規格厚板に対する不況カルテル結成について内々検討が行なわれるなどむしろ市況対策の強化がはかられつつある。また合繊(ナイロン)、板紙についても減産強化などにより足元をさらに固めていこうといった動きがみられ、また塩ビ部門でも4月以降新たに減産に踏み切ることが決定された。このほか、最近市況持ち直しが目立ってきている石油、上質紙、セメントについても引き続き減産体制を維持する方針が示されている。このようにみると、今後需要期入りとともに相場面では、底入れ感が漸次広がっていくことが一応予想されるが、しかし目下の情勢では、これがただちに実需に裏付けられた商況回復局面へつながってゆくかどうかについては即断しえない。

3月の本行卸売物価は前月比-0.1%と月間指数としては5か月ぶりに反落した。これは食料(鶏卵、小豆)、化学、石油・石炭などが引き続き上昇したものの、繊維の反落をはじめ鉄鋼、非鉄、木材など軒並み続落商状を示したためである。なお、4月上旬の卸売物価は、鉄鋼が鋼板類を中心に引き続き軟化したが、繊維(豪毛、生糸、そ毛糸など)をはじめ多くの商品が微騰ないし保合いとなったため、前旬比+0.1%と微騰した。

3月の消費者物価(東京)は、前月比+1.6%(除く季節商品でも+0.5%)とかなりの続騰をみた。これは主として野菜類が端境期と作柄不良による入荷減から高騰したことが主因である。そのほか春の需要期入りから繊維が小反騰し、家具什器も工賃高から上昇、また自由料金も理髪料、パーマメント代を中心に引き続き値上がり傾向をあらためなかった。

3月の本行小売物価(東京)は前月比+1.0%(生鮮食品を除くと+0.4%)と再び反騰した。消費者

物価同様、野菜類の上昇が主因であるが、清酒、醬油の値上がりや春物衣料の季節高も影響している。なお本年の春野菜は、昨年豊作安の反動から、かなりの作付減をみている模様で今後の動きが注目される。

3月の輸出物価は前月比-0.1%と続落した。硫安が国際需要堅調から、また合板が原木高からいずれも上昇したが、鉄鋼(棒鋼、薄板)、繊維(綿糸、スフ糸、織物類)が国内市況軟調を映じて下落したほか食料品(乾燥しいたけ)も続落を示した。一方、輸入物価は、前月比-0.3%と4か月間続落した。繊維(原毛)が続落したほか、石油・石炭がフレート安から、鉄くずが本邦の手当て控えから引き続き軟化したためである。もっとも、すず、鉛など非鉄の持ち直しや粗糖の底値感台頭の動きもみられ、大勢軟調のうちにも目先きやや落着き気配がうかがわれる。

#### 消費者・小売・輸出入物価の推移

(単位・%)

		対前年度比 上昇率		最近の推移			最近月の 前年 同月比
		38年度 平均	39年度 平均	40年 1月	2月	3月	
消 費 者 物 価	総 合 (季節商品 を除く)	+7.2	+4.7	+2.0	+0.1	+1.6	+7.4
	食 料	+7.9	+4.8	+4.4	+0.1	+3.5	+10.8
	家賃地代	+10.7	+9.0	-1.8	+0.9	+0.1	+5.6
	公共料金	+5.3	+3.8	+1.0	+0.4	保合	+4.0
	自由料金	+18.2	+11.0	+1.5	-0.1	+0.2	+10.5
(東 京)	その他商品	+2.6	+2.0	-0.9	-0.1	保合	+2.4
	被 服	+5.6	+2.1	-1.0	-0.4	+0.5	+2.6
	光 熱	-0.1	-0.1	+0.1	保合	保合	-0.4
	住 居	+4.5	+4.1	-0.1	+0.2	+0.4	+2.9
本 行 小 売 物 価	雑 費	+8.4	+6.5	+0.7	+0.1	保合	+6.7
	総 平 均 (生鮮食品 を除く)	+4.5	+2.6	+0.2	-0.3	+1.0	+5.9
	食 料	+4.6	+1.9	+0.4	-0.3	+0.4	+3.9
本 行 輸 出 物 価	食 料	+6.3	+5.3	+1.6	+0.2	+1.7	+9.7
	織 維	+4.3	-0.8	-2.9	-2.8	+0.9	+4.0
本 行 輸 入 物 価	輸 出	+2.7	+0.8	+0.3	-0.1	-0.1	-0.4
	輸 入	+4.4	-0.8	-1.1	-0.4	-0.3	-3.9

### ◇貿易収支は輸出の好調により引き続き大幅黒字

3月の為替収支をみると、経常収支は貿易収支の大幅黒字によりかなりの黒字を示現したが、資本収支が長短資本とも払超となったため、総合収支尻ではようやく均衡するにとどまった。もっとも、外貨準備高はIMFゴールド・トランシュの増加により前月比約3百万ドルの増加をみた(3月末の外貨準備高は2,053百万ドル)。

経常収支は77百万ドルの黒字を記録したが、これは貿易収支が輸出の著伸を主因に134百万ドルの大幅黒字となったためである。貿易収支を季節調整してみても、前月に引き続き136百万ドルの黒字幅を持続したことになる。なお、1~3月の季節変動調整後の貿易収支黒字幅は336百万ドルと、前年10~12月の63百万ドルに比して一段と拡大した。

この間、貿易外収支の赤字は57百万ドルと前月に比べかなりの悪化をみたが、これは期末月のため利子、手数料等の支払がかさんだことによる。

一方、資本収支は70百万ドルの赤字を示現した。長期資本は米国のドル防衛措置の強化が響い

#### 為 替 収 支

(単位・百万ドル)

	39年	10~	40年	40年		
	7~ 9月	10~ 12月	1~ 3月	1月	2月	3月
輸 出	578 (461)	653 (516)	602 (450)	471 (374)	569 (455)	766 (520)
輸 入	507 (471)	560 (529)	551 (543)	548 (506)	474 (546)	632 (577)
貿 易 収 支 尻	71 (△ 10)	94 (△ 13)	51 (△ 93)	△ 77 (△ 132)	95 (△ 91)	134 (△ 57)
貿 易 外 収 支 尻	△ 39 (△ 32)	△ 42 (△ 38)	△ 43 (△ 36)	△ 33 (△ 26)	△ 42 (△ 40)	△ 57 (△ 42)
経 常 収 支 尻	△ 32 (△ 42)	△ 51 (△ 51)	8 (△ 129)	△ 110 (△ 158)	53 (△ 131)	77 (△ 99)
長 期 資 本 収 支 尻	28 (△ 41)	33 (△ 34)	6 (△ 23)	27 (△ 0)	26 (△ 30)	39 (△ 39)
短 期 資 本 収 支 尻	△ 54 (△ 10)	△ 55 (△ 21)	6 (△ 99)	128 (△ 163)	△ 63 (△ 55)	△ 31 (△ 80)
資 本 本 収 支 尻	△ 26 (△ 51)	△ 22 (△ 55)	13 (△ 122)	155 (△ 163)	△ 37 (△ 85)	△ 70 (△ 119)
誤 差 脱 漏	△ 5 (△ 7)	△ 16 (△ 14)	△ 3 (△ 14)	△ 17 (△ 28)	7 (△ 8)	7 (△ 5)
総 合 収 支 尻	1 (△ 1)	13 (△ 9)	17 (△ 21)	28 (△ 23)	23 (△ 54)	0 (△ 15)

(注) カッコ内は前年同期(月)額、各期月平均。

### 輸出入指標(季節調整済み)の推移

百万ドル

(単位・百万ドル)

	輸 出				輸 入			
	為替	通関	信用 状	認証	為替	通関	信用 状	承認
39年 4~6月	524	534	470	564	523	655	284	531
7~9月	570	571	500	611	528	632	317	589
10~12月	594	618	518	636	573	697	290	628
40年 1~3月	655	679	561	740	543	659	279	573
39年 11月	604	625	495	614	589	701	276	653
12月	603	605	563	651	567	697	299	625
40年 1月	615	668	525	717	551	663	249	541
2月	628	675	539	752	492	674	270	557
3月	721	694	619	750	585	639	316	622

(注) 季節調整はセンサス法による、各期月平均。

たうえ、ガリオア・エロア返済分などの大口流出がかさんだため、39百万ドルの赤字をみた。また短期資本も、上記ドル防衛策の影響のほか、輸出急増に伴う為銀買持輸出手形の増加もあって31百万ドルの赤字となった。

3月の輸出は、前年同月に比し、為替+47%、通関+36%と引き続き好調であった。とくに為替では1月+26%、2月+25%に比べ一段と上伸が目立つ。季節変動調整額でみても、1月615百万ドル、2月628百万ドルに対し、3月は721百万ドルと一段とその水準を高めた。なお、為替輸出が通関輸出に比べてかなり高い伸び率を示しているのは2月末日が休日であったため、2月末通関分の為替買取が3月へずれ込んだことによるものと思われる。

商品別の動きを通関でみると、前年同月比較では鉄鋼が一段と水準を高めたほか、機械も自動車、船舶を中心に引き続き好調であり、化学肥料、合繊織物、光学機器なども順調な伸びを示した。ただ当月の場合、米国鉄鋼ストに備えた鋼材輸出の引き続き集中、鯨油輸出のくり上がり、期末船積み急ぎが例年よりやや多かったとみられることなどの特殊要因もあり、これが輸出全体の水

## 輸出認証の内訳

(単位・百万ドル)

	39年		40年		40年	
	7~9月	10~12月	1~3月	1月	2月	3月
織 維	131 (+15)	143 (+16)	125 (+18)	112 (+21)	123 (+8)	141 (+24)
化 学 品	35 (+28)	38 (+41)	47 (+65)	43 (+90)	46 (+41)	52 (+71)
金 属	118 (+41)	127 (+43)	133 (+65)	110 (+40)	138 (+87)	152 (+68)
機 械	200 (+30)	237 (+40)	234 (+50)	192 (+57)	242 (+77)	268 (+29)
雑 品	47 (+12)	41 (+23)	41 (+34)	32 (+30)	43 (+33)	49 (+37)
合 計	632 (+26)	684 (+27)	677 (+38)	570 (+37)	681 (+43)	781 (+34)
米 国	193 (+31)	184 (+29)	186 (+38)	154 (+36)	190 (+44)	216 (+34)
ア ジ ア	125 (+6)	160 (+16)	149 (+26)	131 (+24)	142 (+26)	174 (+28)
欧 州	67 (+14)	68 (+8)	78 (+13)	62 (+25)	74 (+10)	97 (+9)

(注) カッコ内は対前年同期(月)比増減率%、各期月平均。  
 アジアはインド、タイ、フィリピン、マレーシア、インドネシア、台湾、韓国、香港、琉球。  
 欧州は英国、西ドイツ、フランス、イタリア、スイス、ベルギー、オランダ、デンマーク、スウェーデン、ギリシア。

準を実勢以上に高めていることは見のがせない。

先行指標をみても、前年同月に比し、輸出信用状+43%、輸出認証+34%と高水準を持続した。商品別には、金属、機械、化学製品などが前年水準を大幅に上回っており、引き続きこれらの商品を中心に輸出好調が続くものと思われる。

3月の輸入は、通関ではほぼ前年同月並みに推移したが、為替では前年同月に比し+10%とかなり水準を高めた。もっとも為替輸入は、米国東海岸における港湾ストの影響により前月著減したため、当月の増加にはその反動による分も含まれているものとみられる。ちなみに1~3月をならしてみると、前年同月に比し、為替+2%、通関-1%と依然落ち着いた動きを示している。

3月の輸入通関額を季節変動調整後の計数で見ると、639百万ドルと前月比30百万ドルあまり落ち込んだことになるが、これは前記港湾ストの影響が通関面では3月にずれ込んであらわれたため

である。現に商品別の動きをみると、とうもろこし、大豆、くず鉄など、為替ベースではすでに2月に減少を示したものの減少が目立っている。このように、港湾ストの影響が食料を中心にみられたこともあって、3月の食料輸入は前年同月を依然下回ったが、このほか原材料輸入も引き続き、総じて落ち着いた傾向に推移している。とくに、原綿、原毛などの繊維原料は国内繊維市況の低迷を映じて買付け低調であり、くず鉄は港湾ストの影響も加わって減少している。ただ反面で、鉄鉱石や石炭は高炉の稼働増加によって増勢を示しており、石油もすう勢的に増加している。

次に、輸入素原材料在庫の最近の推移を、季節性を調整した動きで見ると、前年11月以降かなり在庫食いつぶしが行なわれてきたが、2月には

## 輸入承認品目別内訳

(単位・百万ドル)

	39年		40年		40年	
	7~9月	10~12月	1~3月	1月	2月	3月
食 料	93 (+6)	121 (-18)	119 (+10)	79 (-17)	107 (-3)	171 (+45)
原 材 料	320 (+8)	343 (-12)	328 (+10)	308 (-4)	320 (+9)	358 (+28)
原 綿	34 (+14)	39 (-18)	39 (+5)	34 (+7)	43 (+4)	41 (+5)
原 毛	27 (+3)	29 (-34)	28 (-15)	23 (-24)	28 (-22)	33 (+2)
鉄 鉱 石	26 (+7)	25 (-21)	28 (+32)	26 (+1)	26 (+41)	30 (+69)
く ず 鉄	21 (-3)	16 (-42)	11 (-26)	13 (-26)	10 (-16)	10 (-34)
木 材	34 (+22)	30 (+2)	32 (+20)	30 (-18)	31 (+41)	36 (+61)
石 油	65 (+30)	79 (+12)	81 (+18)	76 (+6)	80 (+21)	88 (+28)
化学製品	38 (+4)	41 (-2)	35 (-13)	41 (+11)	27 (-35)	38 (-13)
機 械	55 (+3)	59 (-5)	48 (-29)	46 (-51)	45 (-17)	54 (-4)
鉄 鋼	15 (+117)	13 (-7)	11 (-2)	11 (-23)	9 (+0)	14 (+23)
そ の 他	43 (+25)	47 (+2)	41 (+16)	44 (+42)	35 (+3)	44 (+8)
合 計	564 (+10)	624 (-11)	583 (+4)	529 (-11)	543 (+0)	678 (+23)

(注) カッコ内は対前年同期(月)比増減率%、各期月平均。  
 39年4月以降は計上方式が変更されたので、前年比についてはそれ以前の計数と連続しない。

むしろ若干の積増しとなった模様である。ここへきて企業の在庫圧縮もほぼ限度に近づいたためであろう。もっとも3月には港湾ストの影響で一部原材料の入着が遅れたため再び在庫食いつぶしとなった公算が大きい。

先行指標をみると、前年同月に比し、輸入信用状+6%、輸入承認+23%と前月とは様変わり増加となっている。とくに輸入承認の場合に前年同月の水準をかなり大幅に上回っているのが目立つが、これは前月、港湾ストの影響により手控えられていたともろこし、大豆などの承認申請が集中したことに加え、前年同月が集計日数の関係で低水準であったことによるものであり、1~3月をならしてみれば前年同月比+4%と比較的落ち着いた動きとなっている。もっとも、こうした中で、鉄鉱石、石炭、石油などは根強い増勢を続けている。

なお、39年度中の為替収支をみると、経常収支は、貿易外収支がすう勢的に赤字幅を拡大しているにもかかわらず、輸出の好調に基づく貿易収支の大幅好転により、50百万ドルの黒字(38年度822百万ドルの赤字)を示現、一方資本収支も短期資本収支が赤字となったものの、長期資本の受超にささえられて157百万ドルの黒字(38年度871百万ドルの黒字)となった。この結果、誤差脱漏調整後

### 39年度中の為替収支

(単位・百万ドル)

	38年度	前年度比 増減	39年度	前年度比 増減
輸 出	5,567	693	7,036	1,469
輸 入	5,980	1,398	6,501	521
貿易収支戻	△ 413	△ 705	535	948
貿易外収支戻	△ 409	△ 184	△ 485	△ 76
経常収支戻	△ 822	△ 889	50	872
長期資本収支戻	474	177	323	△ 151
短期資本収支戻	397	368	△ 166	△ 563
資本収支戻	871	545	157	△ 714
誤差脱漏	△ 96	△ 5	△ 173	△ 77
総合収支戻	△ 47	△ 349	34	81

の総合収支戻では34百万ドルの黒字(38年度47百万ドルの赤字)を示した。

また輸出入の商品別の動きを通関でみると、輸出は前年度比+28%の著伸を示し、とくに鉄鋼、自動車、船舶、合繊、化学肥料などが前年度水準を大幅に上回ったのをはじめ、ほぼ軒並み順調に推移した。一方、輸入は前年度比+9%と底堅い中にも落ち着いた動きを示した。とくに輸入商品の大宗をなす原材料は当初、生産増勢を映じて根強い動きに推移したが、年度後半に至り生産増加のテンポが鈍ったことや在庫くいつぶしが進んだことによって頭打ち傾向をたどり、前年度比+7%にとどまったことが注目される。